

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。

【文・写真提供●公文教育研究会】

四季の詠おさな遊 晩秋九月 重陽の節句

溪斎英泉 天保期(1830-44)頃

溪斎英泉は江戸時代後期に活躍した浮世絵師。妖艶な美人画で名を馳せた絵師ですが、扱う画題は様々で、子どもを題材とした作品も多く描いています。この作品は月ごとの風物に合わせて子どもを描いたシリーズの一枚で、「菊の節句」とも呼ばれる九月の重陽の節句がテーマ。右奥の子どもの着物の柄は、重陽の節句にちなんだ菊模様です。

ごっこ遊び

空想力や創造力をフル活用
江戸時代も人気のごっこ遊び

この浮世絵に描かれた4人の男子たちは、「火消ごっこ」をしています。火消とは江戸の消防組織のこと。火事はすべてを焼き尽くす恐れべき災害ですが、木造家屋が建ち並ぶ江戸の町ではなおのこと。もともと大名火消や定火消といった武家による火消がありました。町家を含めた広域で頻発する火事に対

応しきれませんでした。そこで八代将軍徳川吉宗から相談を受けたかの名奉行、大岡越前守忠相が出したお触れにより発足したのが、町人による消防組織、「町火消」です。

粋でいなせな町火消は
子どものスーパーヒーロー

左の子どもが肩に担いでいるのは、火消が使っていた鷹口という道具。江戸時代の消火活動は、周囲の建物を取り壊して延焼を防ぐことが主で、鷹口は建物を引き倒すときに使いました。そして右の子どもが高く掲げる纏は、浮世絵上部、扇形の中に描かれた橋（京橋／現・東京都中央区）を管轄していた町火消「も組」のもの。町火消の発足当初、隅田川町以西に47あった町火消には「いろは」など（「へ、ら、ひ、ん」↓「百、千、万、本」）の文字が当てられていました。

火消の誇りは命を張って火に立ち向かうこと。他の組に負けるものかと、火消衆は先を争うように火に立ち向かい、自分たちの存在を示す纏を振り掲げたのです。そんな火消たちの心意気を江戸の人々は「火事と喧嘩は江戸の華」と称賛しました。粋でいなせで威勢のよい町火消は、江戸の子どもたちにとって、まさにスーパーヒーロー。火消衆になりきった子どもたちの顔は「どんなもんでえ」と言わんばかり。何とも誇らしげに見えませんか？

江戸ミニ知識

町火消「め組」の話

この記事ではじめて町火消について知った方でも、「め組」という名前は聞いたことがあるかもしれません。め組は現在の浜松町から増上寺門前付近を受け持った町火消。文化2（1805）年、同地区にある芝神明宮で、め組の火消衆と力士たちが起こした大喧嘩の顛末が、「め組の喧嘩」として歌舞伎や講談に取り上げられた事で、その名が知られるようになりました。武士身分である力士が、町人である火消衆を格下に扱ったことが喧嘩の一因。日頃からの武士に対する町人のうっぷんを、「め組の喧嘩」は見事に晴らしてくれたのかもしれません。



公文教育研究会からプレゼントがあります。6～7ページをご覧ください。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note

ここで紹介した作品はウェブサイト
「くもん子ども浮世絵ミュージアム」
<https://www.kumon-ukiyo.jp>でも
ご覧いただけます。